

氏名(本籍)	宮地明子 (愛知県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博課第328号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	日本古代国家論
論文審査委員	(委員長) 助教授 西谷地 晴 美 教授 舘 野 和 己 教授 小路田 泰 直 助教授 加 須 屋 誠

論文内容の要旨

本論文は、礼と法の視点から古代日本と中国を比較検討し、日本古代国家がつくりあげた国制の特性を考察したものである。

序章「問題の所在と構成」では、本論文の目標と研究の視点を整理している。筆者は日本国制史におけるいくつかの明白な事実をふまえて、日本ではなぜ易姓革命がおこらず、天皇は「万世一系」とみなされ、日本は日本としてあり続けることができたのか、という問いを提示する。この問題を考察するために筆者が着目したのが、日本国制上に重要な役割を担い続けた律令法である。ここでは、律令法を東アジア世界における中国の冊封体制との関係のなかに位置づけ、さらに古代日本と中国との国制の相違を、両国の礼と法の位置づけの違いに見いだす、という本論文の基本的視点を説明している。

第一章「日本古代国家論－礼と法の日中比較より－」では、礼と法の視点をもとに、古代日本と中国を比較し、日本古代国家が作りあげた国制の特性を検証している。

第一節「日中関係からみた古代日本の礼制と法制」では、冊封をはじめとする中国外交の思想的基盤には、中国皇帝を頂点とした礼的国際身分秩序が存在したが、礼典を欠落させ、律令法典を重視するという日本独自の姿勢は、東アジアの国際社会において大きな意味をもっていたことを明らかにしようとする。筆者は、推古期の遣隋使を記した『隋書』と『日本書紀』で中国国制の価値認識が相違している点を明らかにし、日本の律令と中国の律令が質的に異なる法であった可能性を指摘した。また、聖武期は礼制の継受が始まり、古代日本の国制が少なからず転換した時期であると推定した。

第二節「日唐田令の比較」では、律令法の根幹をなす日唐田令の比較をつうじて、その差異をより

詳しく検証し、さらに、土地法の根拠となる政治思想を、特に礼制の問題を中心に考察した。その結果、限田制的な要素を欠いた日本班田制は、隋唐均田制とは異なる原則に立つ異質な法であったこと、日本の古代国家は、儒家思想ではなく法家思想に近い政治思想をもっていたこと、聖武期に制定された限田制的要素を含む墾田永年私財法は、礼制を前提としない日本律令体制を変革し、礼制継受へと導く法であったこと、などを主張した。

第三節「日本的法制における十七条憲法の意義」では、第一節および第二節の結果をもとに、日本律令を規定する日本的法制の基本的な形態が存在するということを、日本最初の成文法ともいわれる十七条憲法の論理を復元することで明らかにしようとした。筆者は『日本書紀』において公の字が多く記されるようになるのが推古期以降であることに注目し、推古期に作られた十七条憲法は法家思想における公法の論理に基づいていたことを推定する。さらに十七条憲法第一条の「和を以て貴しとなす」という基本精神は、第十五条の法家の公法思想によって支えられている点を指摘し、十七条憲法は法を基本とした古代日本の国制の「憲法」であったと主張する。

第二章「古代における天下と皇帝・天皇権力の公共性論」では、同様に天下を称した中国と日本において、天下を統治すべき皇帝・天皇権力の正統性の根拠が、どこに求められていたのかを比較検討した。

第一節「天と皇帝・天皇の位置づけ」では、天下を統治する君主の支配の正統性を問題とし、君主による天への認識および天と君主との関係について、中国皇帝と日本天皇との違いを検討した。その結果、中国皇帝は支配の正統性の根源となる天に対して自己をあくまで受命者として位置づけるが、日本では天子は皇孫を意味し、日本の天皇は天と自己を血統でつなごうとした点を明らかにした。

第二節「法と公共性」では、支配の正統性の根源となる天への認識も、天と天皇の位置づけも、中国のそれとは大きく異なっていたと思われる日本において、天下を統治すべき君主権力の正統性はどのように実現されていたのかを検討した。その結果、十七条憲法は法の公共性の確立を目的としており、古代日本においては天下の公共性が公法の論理によって実現されていた点を指摘した。

第三節「天皇と法の関係」では、法を超えた存在としての中国皇帝と、法を守ることが求められた日本天皇との相違に着目し、即位宣命と立太子宣命を考察した。その結果、中国の遺詔と冊文では、天命思想とのかかわりから、新たに皇帝となる皇太子の資質のすばらしさを説くのに対して、古代日本の即位宣命や立太子宣命では「法の随に」という文言が示すように、「法」にしたがうことが天皇の正統性の根幹とされたことを明らかにした。筆者はさらに、有名な「不改常典」を法意識から考察し、それは皇位継承にのみ限定される法ではなく、近江令から始まったと観念される日本律令全般を示すものと推定した。

終章「日本国号の誕生と日本古代国家の本質」では、第一章と第二章の成果をふまえ、古代において日本という国名が、いつ、どのように誕生してきたのか、すなわち日本の古代国家のなりたちとは

何かを整理し、日本国家の本質に言及している。

第一節「倭国から日本へ」では、倭国から日本国への変化を、当時の人々の世界観や国際関係の視点から、時代をおって検証し、七世紀初頭の推古朝の意義を再確認している。

第二節「日本律令の意味と日本古代国家の本質」では、日中の国制の比較から日本古代国家の本質に言及し、それを「礼の国中国」に対する「法の国日本」として提起した。法を国家の本質とする日本では、易姓革命は決しておきず、天皇は「万世一系」とみなされ、日本はどこまでも日本であり続けるという、本論文の問いへの解答が示されている。

第三節「日本国の誕生と十七条憲法」では、そのような本質をもつ日本古代国家の誕生にとって、重要な役割をはたしたと思われる十七条憲法について、再度整理がなされている。

最後に、「律令国家財政における『公平』の構造」を論じた補論が付されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、礼と法の視点から古代日本と中国を比較検討し、日本古代国家がつくりあげた国制の特性を考察したものである。

序章「問題の所在と構成」では、本論文の目標と研究の視点を整理している。筆者は、古代以来日本の国号に変化がなかった事実、日本では王朝交代がなかった事実、日本には強い皇統意識が存在し、大化前代をのぞけば易姓革命が起こっていない事実に注目する。筆者はこのような日本国制史における明白な事実をふまえて、日本ではなぜ易姓革命がおこらず、天皇は「万世一系」とみなされ、日本は日本としてあり続けることができたのか、という問いを提示する。この問題を考察するために筆者が着目したのが、日本国制上に重要な役割を担い続けた律令法である。ここでは、律令法を東アジア世界における中国の冊封体制との関係のなかに位置づけ、さらに古代日本と中国との国制の相違を両国の礼と法の位置づけの違いに見いだす、という本論文の基本的視点を説明している。

第一章「日本古代国家論—礼と法の日中比較より—」では、礼と法の視点をもとに、古代日本と中国を比較し、日本古代国家が作りあげた国制の特性を検証している。筆者が重視したのは、中国では礼典と律令法典が別個に存在し、礼典を前提として律令法典がなりたっていたが、古代日本は礼典を作ることなく、体系的な律令法典のみを作っているという事実である。

第一節「日中関係からみた古代日本の礼制と法制」では、冊封をはじめとする中国外交の思想的基盤には、中国皇帝を頂点とした礼的国际身分秩序が存在したが、礼典を欠落させ、律令法典を重視するという日本独自の姿勢は、東アジアの国際社会において大きな意味をもっていたことを論じている。筆者は、推古期の遣隋使を記した『隋書』では日本の朝貢理由を隋が「礼儀の国」である点においているのに対して、『日本書紀』では中国が「法式備り定まれる珍国」である点に遣唐使派遣の意義を見いだしており、当該期の日中における中国国制の価値認識が相違している点を明らかにした。また、日本に対する中国の外交文書の文書形式の相違や、礼制にかかわる朝廷への文物の献上記録などに基づいて、聖武期は礼制の継受が始まり、古代日本の国制が少なからず転換した時期であると推定した。古代国家は礼典そのものの継受を初めから念頭に置いておらず、日本の律令と中国の律令は質的に異なる法であった可能性があるという、『隋書』と『日本書紀』との比較検討から導き出された筆者の想定には、論理的な説得性がある。

第二節「日唐田令の比較」では、律令法の根幹をなす日唐田令の比較をつうじて、その差異をより詳しく検証し、さらに、土地法の根拠となる政治思想を、特に礼制の問題を中心に考察している。その結果、①前漢の限田制だけでなく隋唐均田制も井田制を意識した土地制度であり、礼制とかかわる

法であったこと、②限田制的な要素を欠いた日本班田制は、隋唐均田制とは異なる原則に立つ異質な法であったこと、③士・農・工・商という礼制の基礎となる四民分業形態を、日本令は唐令から継受していないこと、④日本の古代国家は、儒家思想ではなく法家思想に近い政治思想をもっていたこと、⑤聖武期に制定された限田制的な要素を含む墾田永年私財法は、礼制を前提としない日本律令体制を变革し、礼制継受へと導く法であったこと、などを主張した。本節の主張は極めて論理的に構成されており、第一節の結論とも整合している。なお、論証の過程で示された、『令集解』の古記が大宝令の純粋な注釈書ではなく、礼制の改革のなかで記された新しい時代の法解釈の書であったとする筆者の推定は、議論を呼ぶだろう。

第三節「日本的法制における十七条憲法の意義」では、第一節および第二節の結果をもとに、日本律令を規定する日本的法制の基本的な形態が存在するということを、日本最初の成文法ともいわれる十七条憲法の論理を復元することで明らかにしようとしている。筆者は『日本書紀』において公の字が多く記されるようになるのが推古期以降であることに注目し、推古期に作られた十七条憲法は法家思想における公法の論理に基づいていたことを推定する。さらに十七条憲法第一条の「和を以て貴しとなす」という基本精神は、第十五条の法家の公法思想によって支えられている点を指摘し、十七条憲法は法を基本とした古代日本の国制上の「憲法」であったと主張する。

第二章「古代における天下と皇帝・天皇権力の公共性論」では、同様に天下を称した中国と日本において、天下を統治すべき皇帝・天皇権力の正統性の根拠が、どこに求められていたのかを比較検討した。ここで筆者が重視したのは、日本の古代国家が、中国本来の天下とそれを貫く礼的国際身分秩序から離脱し、独自の天下観念を形成したという事実である。

第一節「天と皇帝・天皇の位置づけ」では、天下を統治する君主の支配の正統性を問題とし、君主による天への認識および天と君主との関係が、中国皇帝と日本天皇とでどのように相違しているかを検討した。その結果、中国皇帝は支配の正統性の根源となる天に対して自己をあくまで受命者として位置づけるが、日本では天子は皇孫を意味し、日本の天皇は天と自己を血統でつなごうとした点を明らかにした。

第二節「法と公共性」では、支配の正統性の根源となる天への認識も、天と天皇の位置づけも、中国のそれとは大きく異なっていたと思われる日本において、天下を統治すべき君主権力の正統性はどのように実現されていたのかを検討した。その結果、十七条憲法は法の公共性の確立を目的としており、古代日本においては天下の公共性が公法の論理によって実現されていた点を指摘した。

第三節「天皇と法の関係」では、法を超えた存在としての中国皇帝と、法を守ることが求められた日本天皇との相違に着目し、即位宣命と立太子宣命を考察した。その結果、中国の遺詔と冊文では、天命思想とのかかわりから、新たに皇帝となる皇太子の資質のすばらしさを説くものに対して、古代日本の即位宣命や立太子宣命では「法の随に」という文言が示すように、「法」にしたがうことが天皇

の正統性の根幹とされたことを明らかにした。筆者はさらに、有名な「不改常典」を法意識から考察し、それは皇位継承にのみ限定される法ではなく、近江令から始まったと観念される日本律令全般を示すものと推定している。日中の比較検討から、即位宣命と立太子宣命のなかに日本独自の国制としての法意識を見だし、「不改常典」をもその文脈で解釈できるとする筆者の視点は、論理的かつ斬新である。

終章「日本国号の誕生と日本古代国家の本質」では、第一章と第二章の成果をふまえ、古代において日本という国名が、いつ、どのように誕生してきたのか、すなわち日本の古代国家のなりたちとは何かを整理し、日本を日本たらしめてきた国家の本質に言及している。

第一節「倭国から日本へ」では、倭国から日本国への変化を、当時の人々の世界観や国際関係の視点から、時代をおって検証し、七世紀初頭の推古朝の意義を再確認している。

第二節「日本律令の意味と日本古代国家の本質」では、日中の国制の比較から日本古代国家の本質に言及し、それを「礼の国中国」に対する「法の国日本」として提起した。法を国家の本質とする日本では、易姓革命は決しておきず、天皇は「万世一系」とみなされ、日本はどこまでも日本であり続けるという、本論文の問いへの解答が示されている。

第三節「日本国の誕生と十七条憲法」では、そのような本質をもつ日本古代国家の誕生にとって、重要な役割をはたしたと思われる十七条憲法について、再度整理がなされている。

本論文が考察の対象とする日本古代史の研究分野では、最初の国史である『日本書紀』に対する評価が研究者の間で一定せず、その使用が半ば封印された状況にあり、国制史研究において最も基本的な史料がそのままでは使用できないという難題を抱えている。この難題を突破するために日本古代史研究は総合的な視点から精緻な実証を積み上げてきたが、筆者は論理的思考を重ねることによって新境地に到達するというもう一つの方法を選択している。本論文で筆者がとった手法は、必ずしも明確に提起されているわけではないが、以下のように整理することができよう。それは、国制史上明白な事実を指摘し、それに基づく問いを立て、日中の国制比較をつうじてその課題に迫り、論理的な整合性（論証）の積み重ねによって『日本書紀』の封印を解き、問いの解答を導き出す、というものである。

筆者のこの手法は、第一章第一節と第二節および第二章第三節の分析において大きな成果をあげたが、次のような解決すべき課題も残された。それは、①礼典の継受と礼制の継受との相違点を論理的に整理検討しなかったために、十七条憲法など推古期の史料に見られる礼制の記事を、日本古代国制史上に的確に位置づけることが十分にはできなかったこと、②十七条憲法の信憑性の問題に踏み込まないことで、その全文解釈の必要性は論理的に回避できたが、そのため逆に、仏教など十七条憲法に規定された国制の中核となる他の要素を古代国制史上に十全に取り込めなかったこと、などである。論証の繰り返しがいくつか目につく点も含めて、本論文にはなお改善の余地があるが、本論文が提起

した問いの重大さ、論理的な思考水準の高さ、導き出された結論の斬新性などは、日本古代国制史研究において高く評価されるものである。

本論文は、「律令国家財政における『公平』の構造」(『寧楽史苑』50号、2005年)、「日本古代国家論—礼と法の日中比較より—」(『日本史の方法』3号、2006年)を基に、日本古代の国制のあり方を論理的にさらに深く追究したものであり、本学博士(文学)の学位を授与するに十分な資格を有するものと本委員会は判断する。